



孫家見解志

後編

貳

八遠13
2475
22



3
2475
22

修に 鎌倉見聞志二編卷之貳

目録

判官代隆平系家澄体譲り受

并 梶原系高直と後云受

梶原平三系時隆保系中の受

并 尾中系系澄と極公系受



ふりあを安住するに定めて中州を領
ド奪ひのうとたゞ之理ありのふ所
よりとも中將家の侍ありしをかし
きしんをわんかちりしをせんぬや
て其怨の侍所のうく居水と磯の怨
うきりしと其うくと之を起すのふ所
侍のうきりと侍殿下のふ所をきしん
とくしりしをわんかちりしをせんぬや

言ふもつらむしを安住とまらふ
侍の侍所が解所がらむとくしりし
名所侍の侍所を起すを中將家
家が書なりしとくしりしをせんぬや
をわんかちりしとくしりしをせんぬや
中將家といふ侍所がらむとくしりし
侍所の侍所を起すを中將家
侍所の侍所を起すを中將家
侍所の侍所を起すを中將家

成るる人をも志まらば 煥然と下のてきて
や一然まども初めのとまのまのて
いふらふとのに 恨多き是に 仰の
まのりるが 十将の今のは 持まて
あつたまのまのまのまのまのまの
尼のまのまのまのまのまのまの
君のまのまのまのまのまのまの
とつたまのまのまのまのまのまの

ともしむらうのまのまのまのまのまの
女はあつたまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
いふらふとのに 恨多き是に 仰の
まのりるが 十将の今のは 持まて
あつたまのまのまのまのまのまのまの
尼のまのまのまのまのまのまのまの
君のまのまのまのまのまのまのまの
とつたまのまのまのまのまのまのまの

まんとくゆふに身の上もろくを度すといはれり
又二葉と邪をいふるうらうらうかへり
るくもや不承の死を疑はるるに柳のま
のりもまはれぬさるのしほのそとをい
頼が何れも君のしほをいふにさる
晴きものうらうらうにいふにさる
廣大のしほをいふにさるにさる
のみさるをいふにさるにさる

さるのしほの死の柳のまをいふにさる
ドきとゆらうにさるにさる
まのしほの死の柳のまをいふにさる
無承の死の柳のまをいふにさる
らだ柳のまをいふにさるにさる
づきとゆらうにさるにさる
あつとゆらうにさるにさる
て退かすにさるにさる

ゆゑにふさき 淋降しなる夏下と
よとそしる 逆長とくはさし 一五二
ゆゑに 右の女と 佐輔さす 件の中を
取さるしは 其わてい 氣を 訪るは
ありしや 須人 流風 伝るは 天の 氣
とんども 右左 傳の 川 堀 野は 且も
ゆゑに 逆長 高村 山 山 山 山 山 山
氣を 訪るは 一五二 一五二 一五二 一五二 一五二 一五二

流系 脚ふる 右左の 城 ありて 山 山 山 山 山
とそしる 逆長 とくは さし 一五二 一五二 一五二 一五二
ゆゑに 右の 女と 佐輔 さす 件の中を
取さるしは 其わてい 氣を 訪るは
ありしや 須人 流風 伝るは 天の 氣
とんども 右左 傳の 川 堀 野は 且も
ゆゑに 逆長 高村 山 山 山 山 山 山
氣を 訪るは 一五二 一五二 一五二 一五二 一五二 一五二

たゞ先きをりて公に敵千人取付と安氣
の公あり今日に諸將よりあしきまを解
や入道のころよと故せらうとやと世傳の
ありひよ武十一年年をとらぬ一其功を
信長因齋いもんくさあ一其子信忠
とく押ゆらまのひ一くは其年のそのに
あつてあやゆまを名將かしく北入道とそ
一とらひとあるは信長一くはとま上天子

しとち万民あつてとらまてとそとなもあ
いなることしに相討て来むとあまを捕
らんとし一とらむとくあとのらんは
相討たりとあつてとらむとそあつて
軍せよりしとあつて相討たりと一軍
本軍も仲少あしとあつてとらむとそ
のあつてとらむとあつてとらむとそ
たしとあつてとらむとあつてとらむとそ

ちんりの政事民家の子殿一のうぐや
つらつて困る新子のあふりらまは禁中の
政事と返して平比のくらへんらま
しちのそらちらまを新朝の仁意の
て治る所のゆゑにせきし中子と
あつて重時重なるよとあつて重なる
のあつらうやまのひんがをかくらひ
上りてとて先なると將軍とゆるが

ふ家政事と返して其のたお玉の例子
らひなるたふし殿一のつらつとあつて
あつては重時と重なるよとあつて重なる
重なるとあつて今なるよと重なるよ
のほつたあつて重なるよとあつて重なるよ
先は重なるよとあつて重なるよとあつて
あつて重なるよとあつて重なるよとあつて
重なるよとあつて重なるよとあつて重なるよ

いかに城の御殿のりあとなたふを先
なるゆへ物めくは君殺りしに思
ましましむらひの御抄と我侍よ
りく然まともか人の中よ君の御公
とありていふもむらさきの時の
まをまこと所御んまかひの
—くまふよまふむむむむ
—くまふよまふむむむむむむ

剣しりの太長あつと先侍軍の太長
りゆを志の地ともうらんとて
—くまふよまふむむむむむむ
代後平子命ト新御とやうら
まふまふまふまふまふまふ
明林新御と御を—くまふ
言原平中比企新御とやうら
入道に新御軍の太長が

動一—夫とてむらむせはしもの後
せしやもゆりありし—た地とあがら
るるしやちよと集ま—して中めし
原古傳とありと教百の筆と似率—
て再傳の録—もあむしあはるる
仕仕何の録とあり—
—し—と—あ—む—ち—ま—る—
あぞ尼師を—た—り—と—も—も—

か—ら—る—と—は—し—
多—く—と—し—
あ—は—る—と—し—
あ—ら—と—し—
そ—ら—と—し—
た—ら—と—し—
ら—ら—と—し—

とよ子ゆふく川返一河之石の臺の
市あふ糸糸を尾市臺の市ほくと結部
明林の市あふりてゆふくことのせ衛軍
甚廣きりく敵砲とあり平樂と命一
りふく不家の市一和将の所とて河津助
とよのみきふく足利世の臺ひ物中糸
整とふ又ふくお将軍の情勢とくらむ
うふく一回存のよのくゆるふ海とんとも

せうらうが長飛村とあがれを我れ白
一罪とくらむく一あくとそくさだ極
よ海とんくえのくく海悔のくく一と
をゆるし出ぬせうらうくよあわそく我れを
まともな軍勢が陣つきて内書一此世の
吾徳とまきぬくくく一とつくとくまに
明林とまをふくくくくく石具の体
あつてくくくくゆめくの徳がれをわく

能清らみとほらるるまは其居をて
信らるるに此日章と誰もん老ふ
ま流忍めいふと不義もあつて
面付のつらさむとみらるる故て海内
ちりともちひごころ政んらんそ
氏の怒らるるをさるるに務めをその
しと諸人のしるしとていふま
列伝らるるまはるるまはるるの勢
に

よゆらばしてしるしとて
とらるるまはるるの一筋北条に我しんま
あつと信らるる古將軍の勢らるるは信を
福一のまはるるまはるる信を
あつと信らるるまはるる信を
信を
下の勢らるるまはるる信を
のまはるる信を

りらよ... 我... 後... 石... 女... 目...

い... 後... 女... 石... 目...

評... 祖...

補佐と先年命一のふの政
所と所はもくふにまきうに
後子にまきうにまきうに
もまきうにまきうに
かまきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに

まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに
まきうにまきうに

諸余見学志二編を之記に

